

田植えが出来なかった南相馬は、6月になっても時折寒い日があり初夏の実感はなかったのですが、このごろようやく半そでを意識するようになりました。

あつというまの1ヶ月でした。夏休み中だけでも子どもたちをここから外へ出したいという想いで、受け入れ先や、地元の受け入れ窓口をつくろうと駆けずり回る日々でしたが、おかげさまで南相馬市のPTA連絡協議会の会長さんがそのお役目を引き受けてくださり、いくつかのプログラムが進行中です。たとえば、南相馬から福井へ避難したYさんのご縁で、福井のパパジャングルという団体から子ども同士の交流のお誘いをいただいたのをはじめ、長野、山形、京都などの団体からもいろいろなご提案をいただいております。また、7月にスタートする世界一周のピースボートの旅に南相馬の中学生をシンガポールからエジプトまでの間に乗せていただくというビッグな企画も持ち上がっており、外側の皆様の熱い想いに背中を押されて行動しております。

「危ない、危ないと騒ぐな！」というお叱りの声もありますが、日々、線量計の数字を気にしながら子どもと暮らす親の気持ちは察して余りあるものがあります。親の不安は子どもに伝播します。この地は緊急時避難準備区域という指定で、子どもたちはバスでの集団登下校、暖かい給食もままならないという不自然な学校生活が続いているのです。この閉塞感に少しでも風穴を開けたいと「夏休み子ども脱出大作戦」と銘打って始めた行動でしたが、私たちの声が、この地の子どもたちの状況に危惧の念を抱いておられた多くの外側の皆様に伝わり、つながることができ、実現に向かって着々と進行中です。今からでも協力していただける団体がありましたら、声を掛けてください。窓口は西道典さん（hachiman@bb.soma.or.jp）です。宜しく願いいたします。

振り返ってみると、この地は、声を挙げることを嫌う土地柄だったような気がします。それは、狭い地域でもそれなりに機能しており、際立った不都合が見えてこなかった地域だったからかもしれません。待っていればいずれは、満足するものではなくても「ほぼ、ほぼ」に希望が叶えられる、そんな状態が長年続いてきたような気がします。スポーツも学力も就職も、「ほぼ、ほぼ」にがんばれば、子どもたちはこの地で暮らすかぎり安泰に生きていられる、親も周りもそう思っていたのではないのでしょうか。だから、ことさらに問題を指摘して声を挙げる人を疎んじる傾向が続いていたような気がします。「みんながいいということには間違いがない」そういう下地が、原発を増設し、プルサーマルさえも容認してしまったのではないのでしょうか。（この傾向はここだけでなく、日本全土に蔓延していたような気もします。）

しかし、3・11以降全ての基準がひっくり返り、一人ひとりが自己判断で行動を迫られる事態になりました。そこで浮かび上がってきたのは人と人とのつながり「絆」でした。家族や親戚といった血縁の繋がりでなく、友人、知人、地縁といった広い範囲のつながりが「絆」という形になって多くの人の心に生きる勇気を与えてくれました。また自力の限界を支えてくれたのが、全国からの行政支援、自衛隊、ボランティアの皆さんでした。そこで、互いが助け合い、支えあったときに生まれ出た言葉が“ありがとう”でした。

私たちは声を挙げることの本当の力を実感したのです。

今、南相馬では、たくさんの“ありがとう”の奇跡が生まれています。放射能に汚染された地域として全世界にその名を知られてしまった南相馬市は、それを跳ね返し、厳しい現実を生き延びる力を“ありがとう”の気持ちと言葉から頂き、未来に向かって行動を始めています。

ここにひとりの若者からのメッセージを紹介します。

<与えられる人から与える人へ>

震災から一週間たった頃、避難先で物を買占める人達の報道を見てふとNHK大河ドラマの総集編で武田鉄矢さんが作者司馬遼太郎さんの言葉を借りて、興味深い解説をしていたのを思い出しました。

「命惜しむな、名こそ惜しめよ」

もし、命というものが自分の為だけに使われるのなら、命は途切れてしまう。
もし、私という命が誰かの命を励ませば、その命はつながって行く。

被災地に限らず皆、必死に日々の生活を送っています。

“ありがとう”からはじめよう！から始まった活動の最終目標は
『想いをつなぎ・命をつなぐ』ことです！

誰かのために必死で頑張ってくれている人がいて、忘れてはいけない命がある。
大切な人を失った人、生きることで精一杯の人。

みんなそれぞれ、つなぐことができる想いがあり、命があります！
被災者は敗者ではなく、新時代の幕開けを告げる使命を持った勇者なのです。

いつの日かやさしく“ありがとう”といえる日を夢見て共に頑張りましょう！

つながろう南相馬！ 須藤栄治

追伸

今も南相馬には様々な人たちによって援助の手が差し伸べられています。

しかし、ただ1つ、大きな課題は、原発事故を引き起こした当事者である国家と東電に私たちが向き合おうとしたとき、なぜかその姿が見えてこないということです。

見えない相手に向かって声を届ける術を、誰か、教えてください！